

情 報

目 次

1. 集会等の報告 140
1.1. 第4回 海のサイエンス カフェ報告 140

1. 集会等の報告

1.1. 第4回 海のサイエンス カフェ報告

日 時 2009年9月26日(土) 14:00~15:30
場 所 カフェ進々堂(京都市左京区北白川追分町88)
主 催 日本海洋学会教育問題研究会
共 催 井戸端サイエンス工房
話 題 「台風 ~空と海とのあいだには~」
話題提供 伊藤耕介(京都大学大学院理学研究科)
進 行 山田 歩, 他(井戸端サイエンス工房)
参加者 一般市民(16名), 井戸端サイエンス工房(運営スタッフ:6名), 教育問題研究会(オブザーバ:4名), 合計26名

1. オブザーバ参加者の報告

大学付近の老舗の喫茶店で歴史を感じさせる如何にも学生や教員の好みそうな雰囲気のお店である。店内を通過して奥にある中庭の「藤棚風のテラス」で行った。机が4列並んでおり6人ずつ座れる。講演は4列の中央サイドに立って行われた。理想的な場所であった。我々オブザーバは各テーブルに一名ずつ配置され雑談に加わった。

初めに井戸端サイエンス工房の山田さんから趣旨説明と演者の紹介があり、続いて講演が始まった。講演は1部(30分間)と2部(30分間)に分かれていた。その間のコーヒープレイク(20分間)では、質問や雑談をしながら手作りスコーンを食べたり、紅茶やコーヒを飲む段取りになっていた。

1部ではまず場の雰囲気を和らげるためのクイズがあった。その後、台風の導入的な話について、各テーブルにドライアイスと扇風機を用いてうずを作る実験が

行われた。2部では、伊藤さんの研究の話を中心に自由な質疑応答が行われた。最後には質問とアンケートの時間が設けられた。

これら一連の進行手順は参加者を退屈させないように工房スタッフと演者の周回な打ち合わせと計算のもとに行われていたと思われる。伊藤さんの講演もわかりやすく皆さん十分に満足していたように見受けられた。

受付や演者の隣で図を手で持って補助したり、実験の助手をしたり4~5名が手際よく行っていた。ちなみに学生中心の若いスタッフで場を和ませてくれた。

今回は全て井戸端サイエンス工房のスタッフに進行していただいた。プロの進行を見せていただいた感である。今後の部会員の進行役に大いに参考となったと思う。話題提供の伊藤さんならびに山田さん初め工房スタッフの方々に深謝したい。

(乙部 弘隆)

2. 話題提供者からのメッセージ

今回のサイエンスカフェは、みなさん楽しんで聞いていただけたようで、話題提供者としてありがとうございます。今回聞いた話を、何かの拍子に話の種としていただければ幸いです。

開催にあたって、井戸端サイエンス工房の皆さんとは綿密な打ち合わせを3回にわたって行いました。スケジュールや難易度、そして一般のかたの興味がどのようなところにあるかについて、いろいろな話をさせていただきました。個人的なことをいえば、一番の発見は、想像していた以上に自分の中に「自明なこと」としているものが多くあったということでした。台風の発達にとって「凝結熱」の説明はなくてはならないものなのですが、私自身は普段そんなことを考えたこともなく、準備にあたって、これをいかに理解してもらうかについて大変苦労しました。

90分のサイエンスカフェということで20枚ほどスライドを用意しましたが、打ち合わせののち、スライドはたったの8枚になりました。一見これは少ないようにも思えますが、いまでは必要かつ十分な量であったと考えています。結果として、私も落ち着いて話すことができ、かつ、豊富に雑談を入れたり、活発に飛んでく

る質問に可能な限り答えることができたからです。

間にコーヒーブレイクをはさんで、自由にテーブルを回るといことになっていましたが、予定通りに、前半の実験終了の区切りにスコーンが出てきました。これも、「井戸端サイエンス工房」のみなさんの豊富な経験にもとづいたスケジューリング能力のたまものだと感じました。

一般の方との率直な意見交換という、めったにない機会を与えてくださった教育問題研究部会のみなさまと、ご協力いただきました井戸端サイエンス工房のみなさん、そしてわざわざご来場くださったみなさまに再度お礼申し上げます。

(伊藤 耕介, 京大大学院)

3. アンケートの回答

終了後、16名の一般参加者にアンケートを配布し、15名から回答を得ることができた。それらの概略を以下に示す。

1) 海との関係について

「海に対して興味はありますか?」という質問に対して、回答者全員が「ある」または「非常にある」と回答し、その内の12名は、小学生以前または小学生の頃に「海に興味を感じた」であった。

「あなたはどのようなところで海のことを学びますか(複数回答)?」という質問への回答は、

本(8名)、インターネット(6名)、テレビ(7名)、公開セミナー等の行事(4名)、授業(1名)、学ぶ場がない(1名)

という結果だった。今後、海についての理解を広めるためには、従来の書籍やテレビでの発信の他に、インターネットでの発信も効果のあることが確認できた。

2) 提供された話題について

「理解できましたか」という質問に対して、大多数の回答者が「よく理解できた」または「だいたい理解できた」と答えている。ただし、1名から「発生理由をもっと詳しく教えてほしかった。台風シミュレーション(研究内容)をもっと詳しく知りたかった」という改良箇所の指摘があった。今後は、このような積極的な参加者に対応できる時間を「海のサイエンスカフェ」終了後に確保したい。

3) 参加者について

参加者の構成は以下の通りであった。

性別: 男性(6名)、女性(7名)、記載なし(2名)

年齢: 10代(1名)、20代(3名)、30代(1名)、40代(1名)、50代(5名)、60代(2名)、記載なし(2名)

住所: 関西圏内(13名)、関西圏外(1名)、記載なし(1名)

また「海のサイエンスカフェをどこで知りましたか(複数回答)?」への回答は、

インターネット(5名、内訳: サイエンスポータル(1)、京大HP(1)、不明(3))、家族(1名)、ポスター・チラシ(0名)、案内メール(9名)

であった。「井戸端サイエンス工房」から参加経験者へ送信された「案内メール」が非常に効果的であったことが分かる。今後の日本海洋学会地方大会においても、地元の組織と連携して「海のサイエンスカフェ」を開催したいと思っている。

(市川 洋, JAMSTEC)

<参照> 日本海洋学会教育問題研究部会のウェブサイト

http://coast14.iic.hokudai.ac.jp/osj/science_cafe/20090926.htm